

入てこそをはしける、女力をよばず、内に入て、おとなしき人にいかにせんずるぞといひければ、  
一。河。の。な。か。れ。を。く。む。も。み。な。た。し。や。う。の。え。ん。な。り。な。に。か。く。る。し。く。候。べ。き。○  
下

〔萬葉集五〕沈痾自哀文

山上憶良作

我犯何罪遭此重疾略○註初沈痾已來、年月稍多謂經十餘年也是時年七十有四、鬢髮班白、筋力尪羸、不但年

老復加斯病、諺曰、痛瘡灌膿、短材截端、此之謂也。略○中

老身重病經年辛苦及思兒等歌七首長一首 短六首

山上憶良作

靈剋内限者謂浮州人壽平氣久安久母阿良矣遠事母無裳無母阿良牟遠世間能宇計久都良計

久伊等能伎提痛伎瘡爾波鹹鹽遠灌知布何其等久益益母重馬荷爾表荷打等伊布許等能其等老

爾氏阿留我身上爾病遠等加氏阿禮婆略○下

〔後撰和歌集二十〕今上梅壺におはしまし、時、木こらせて奉り給ける。

今上御製

山人のこれるたき木は君が爲おほくのとしをつまむとぞ思

御かへし

御製

としのかずつまむとすなるおもに、はいと、こづけをこりもそへなむ

〔年々隨筆四〕重荷に小附といふことわざいと古し、後撰集に、村上御製、事の數つまんとすなる

おもに、はいと、小附をこりもそへなんとあり、近き代、蘆庵といひし人、やせ馬に重荷にこ

づけつけそへて鞭をおほする世にこそありけれとよめり。略○下

〔言志錄〕諺云、禍自下起、余謂是亡國之言也、不可使人主誤信之、凡禍皆自上而起、雖其出於下者、而亦

有所致、成湯之誥曰、爾萬方有罪、在予一人、爲人主者、當監此言、

〔駿臺雜話一〕年内の立春、されば千里の謬も毫釐の差よりおこるといふも、こにある事なり、

濂溪先生の幾は善惡といへるも、此事なり、是非のさかひ、善惡の關としるべし、